

メディチ家とルネッサンス

世界中の街でフィレンツェほど芸術の香りに包まれている街はないだろう。フィレンツェはそう大きな街ではないが市中には世界の至宝を集めたウフィッツ美術館をはじめ、様々な美術館、博物館が点在し広場や路地にも歴史がある。巨大なドームを持ったフィレンツェのシンボル、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂を中心に由緒ある教会の数々、富豪や貴族の住んでいた堂々たる石造りの邸宅、アルノ川にかかる特徴あるベッキオ橋など見どころは尽きず。頭のなかがかくらくらすような刺激的な街である。



ミケランジェロ広場からフィレンツェ一望

歴史を今に伝えるフィレンツェの街を見るとき、ルネッサンスを現出したメディチ家の存在がどれほど大きなものか街中をさ迷い歩いていると痛いほど実感できる。

ルネッサンスとは再生・復興を意味する美術用語であったが、現在では文化全体の復古革新運動と捉えられ14世紀～16世紀にかけイタリアで花開いた。イスラム勢力の拡大さらにビザンティン帝国の滅亡（1453年）などによって、ギリシャやローマの古典研究をしていた人文主義者たちがイタリアへ集まってきた。それを受けてローマ教皇はじめ、織物工業や金融業で栄えたフィレンツェ、交易都市ベニス、さらにはミラノなどの富裕都市が競って有用な人材を求め芸術家や学者を保護した。

特にフィレンツェのメディチ家のコジモやその孫であるロレンツォは、文芸に深い理解を示し、ルネッサンスに大きな役割を演じた。コジモは古代ギリシャのプラトンの思想に引かれるなど彼らへの保護育成には非常な熱意を持っていた。



ドナテルロ・ダヴィ

メディチ家に集まってきた人文主義者らによる私的な集まりを、プラトンアカデミーといったが、そこには後世に名を残す多くの学者や芸術家たちが出入りしている。建築関係ではフィレンツェの大聖堂のクーポラを建てたブルネレスキ等がいるし、ドーリア式イオニア式コリント式の古典様式が復活している。彫刻ではギベルティやドナテルロ、ミケランジェロ等がいるが、彼らの作品を見ると古代の影響が伺える。イタリアルネッサンスの中核ともいえる絵画ではボッティチェリ、フラ・アンジェリコ、レオナルド・ダ・ヴィ

ンチ、ミケランジェロ、ラファエロ、ティントレット、ジョルジョーネ、ヴェロネーゼなど豪華な顔ぶれが並ぶ。さらに文芸ではボッカチオ、ダンテなどいずれもそうそうたる人物達である。



歴史に名を留めるメディチ家とは、15世紀にメディチ一族の一人ジョヴァンニ・デ・メディチ（1360年～1429年）が、フィレンツェで銀行業を起こした時にはじまる。ジョヴァンニの長男コジモは当時まだ12歳だった。銀行はヴェネツィア、ベルギー、ロンドン等に支店を出して行くが、とりわけローマの支店は教皇に取り入り気に入られ、そのため業績好調で同家の総収入の半分を占めた。また毛織物業にも進出し多額納税者となっていく。

メディチ邸宅リッカルディ宮 ルネサンス運動を支えたメディチ家はフィレンツェのみならずヨーロッパ全域に支店を持つ金融業によって富を蓄積してきた銀行家の一族であるが、由緒ある家系を誇る大商人からするとメディチ家は素性のはっきりしない成り上がり者にみえた。このため名家の誉れ高い家柄との縁戚に腐心し、遂にはローマの名門貴族オルシーニ家との縁組などにより、一族の家名を築き上げていったのである。

メディチ家はジョヴァンニが起こし、コジモが飛躍的に業績を伸ばし事業を拡張したが、コジモの跡継ぎピエロは病弱であり、コジモは孫であるロレンツォに大いなる期待をかけ、政治経済についてはコジモ自身が、その他については当代一流の学者を付けて英才教育を施した。

メディチ家はフィレンツェの名門と姻戚関係をつくるなどしながら政界・経済界で頭角をあらわしていった。一代で巨万の富を築いたジョヴァンニは69歳で没するが、後を継いだコジモ（1389年～1464年）は、商売については父親の薫陶を受け、かつ非常に優れた資質を備えていたので家業は難なく引き継がれた。また学問芸術については父ジョヴァンニをしのぐ理解力を持つ力量を見せた。コジモは巧みな世渡りをなした。当人は微塵も素振りには見せないものの事実上のフィレンツェ共和国の統治者と目されていた。

コジモとその孫ロレンツォ（1449年～1492年）は、政治や外交面で卓越した能力を持ち、そして文芸を愛し保護・奨励した。

多くの学者や芸術家がフィレンツェに集まり、ルネッサンス文化の中心となっていくが、メディチ家はその大スポンサーとしてルネッサンス文化を花開かせるうえで大きな貢献をなしたのである。この時期はまたフィレンツェが最も繁栄した時期と重なる。



メディチ家ゆかりのピッティ宮の威容



アルノ川にかかるポンテ・ヴェッキオ

ロレンツォは人々からは豪華王（ロレンツォ・イル・マニーフィコ）と呼ばれるようになる。だが確固たる財と政治力を持ったはずの順風満帆のメディチ家ではあるが、大きな災厄にも見舞われて

いる。

1478年、メディチ家と競う銀行家であるバツツイ家が、大聖堂でミサの最中ロレンツォと弟のジュリアーノの暗殺を目論み、ジュリアーノは刺殺され、ロレンツォは辛くも難をのがれた。ジュリアーノを刺殺したバツツイ家のベルナルドはコンスタンティノーブルに逃れたが、ロレンツォはトルコのスルタンと交渉し、身柄引き渡しを受け絞首刑に処したが、その様子を描いたレオナルド・ダ・ヴィンチのデッサンが現フランス領バスク地方のバイヨンヌの美術館に残されている。彼の復讐はバツツイ家に連なる一族をフィレンツェから根絶やしにしてしまい、以来市民はメディチ家に大きな信頼を寄せることとなった。



シニョリーア広場 市庁舎



大聖堂とジョットの鐘楼



洗礼堂

1482年ドメニコ派の修道士、ジロラモ・サヴォナローラが激烈な調子でフィレンツェの腐敗した享楽に満ちた日常を強く批判し、神への信仰を中心とする生活に改めるよう説いた。ロレンツォが1492年に43歳の若さで病死し、その長男のピエロが跡目を継ぐがフランス軍の侵略への対応の拙さから市民の怒りを買い、メディチ家はフィレンツェを追われ当主ピエロは不運な死を遂げる。

サヴォナローラに対する人気はうなぎのぼりに高まり、今やメディチ家になり、フィレンツェを統括するサヴォナローラの独裁的支配は4年間にわたって続いていく。

サヴォナローラは市民には修道士のような質素な生活を強要し、無論酒場や娯家などすべて閉鎖したうえ、さらには断食をも強要した。市庁舎前のシニョリーア広場では信仰を妨げる楽器や絵画、書籍などを積みあげ民衆の目の前で焼いたりもした。



サヴォナローラ



シニョリーア広場で火刑



火刑の場所を示すマークに花が絶え

しかしやがてこうした厳しい禁欲的な生活に堪えられなくなった市民の声はしだいに高まり、とどのつまりはサヴォナローラを逆恨みし捕らえ裁判にかけ火あぶりの刑に処した。火刑に処されたシニョリーア広場にはその痕跡を示すマークが地面に描かれているのを目にする。

余談だがアメリカの国名の由来となり、地理学者でアメリカ探検を成し遂げたアメリゴ・ヴェスプッチ（1454年～1512年）はフィレンツェで生まれ、一族の一人はメディチ家に仕えている。

メディチ家はロレンツォの次男であるジョヴァンニが継承し、ハプスブルグ家の支援を得てフィレンツェに戻り、そしてメディチ家の支配を確固たるものにしていく。さらにジョヴァンニはローマ教皇レオ10世として即位するなど権勢を誇った。だがレオ10世はヴァチカンの逼迫した財政を立て直すため、いわゆる免罪符の発行を認めたので、のちの宗教改革運動を巻き起こすこととなり汚点をしるす。

レオ10世が死去した後、いとこのジュリオ枢機卿が教皇クレメンス7世として即位する。

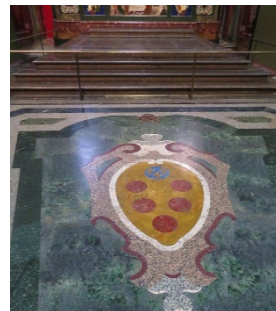
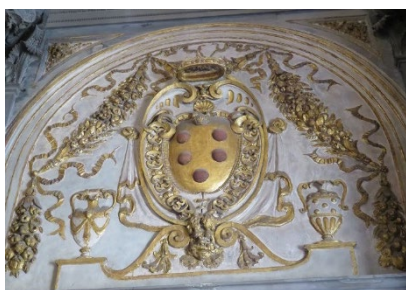
1532年クレメンス7世の息子アレッサンドロがメディチ家の本拠地フィレンツェ公となるも1537年暗殺され、ジョヴァンニ以来の家系が途絶え傍系のコジモ1世が後を継ぎトスカーナ大公国を支配する。コジモ1世亡き後は子孫が代々トスカーナ大公を継承していく。



両翼ともウフィッツ美術館

綿々と続いたメディチ家だが女性のアンナ・マリア・ルイーザ・デ・メディチ（1667年～1743年）は、最後の直系で長い歴史は彼女で途絶える。彼女はフィレンツェのトスカーナ公宮殿である広大なピッティ宮殿に住み、遺言でメディチ家が代々築いてきた美術工芸品はじめメディチ家のすべてをフィレンツェに寄贈するとした。メディチ家の膨大な美術工芸品は散逸することなく現代に受けつがれ目にできるのは彼女の遺言によるものである。

メディチ家の家紋は数個の丸い玉であるが、薬屋か医者に由来する丸薬とか家業の銀行業の貨幣ないしは両替



市内至る所で目にするメディチ家の紋章

のはかりの分銅とか諸説ある。通常6個の玉だがフィレンツェ市内の至る所で目にし、同家の権勢を思い知る。

フィレンツェの街を一望したければ小高い丘にあるミケランジェロ広場か、郊外の山あいのフィエゾーレから眺めるのがいい。オレンジ色の屋根が陽に映え歴史の街全体を見渡せる。

市内の大聖堂やアルノ川が指呼の間であり、素晴らしい景観を見ながら歴史の越し方を想うのも、また一興であろう。

余談だがローマをくまなく歩いてみたが大好きな中華料理屋はほとんど目にする事はなかった。一方フィレンツェは街の来歴が示すように、毛織物工業や絹織物工業で栄えた街である。二つの工業を支えた働き手は、中国からやってきた職工や工女たちである。彼らがそのまま住みつき、その子孫たちが市内で中華レストランを経営しているので、そこここで中華料理を堪能できる。